

(1)下田中学校

学校長 山沖 美保
校内研究代表者 和泉真智子

1. 研究主題

『個に応じた指導方法の工夫』
～全ての子どもの学力向上を目指して～

2. 主題設定の理由

本校の生徒は、小学校から固定化された集団の中で育ってきているため「周りから受ける学習への刺激が少ないこと」や「学習リーダーとなる複数の生徒が他校へ進学したこと」などが学習環境上の課題となっている。

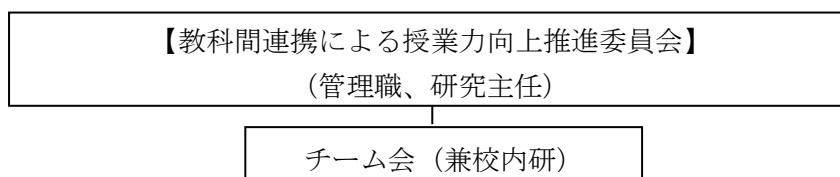
また、ほとんどの生徒に表現力の弱さが見られるだけでなく、基礎・基本が十分に身につけておらず、個別支援が必要な生徒も在籍しており、学習に対する意欲や主体的・対話的な学習活動への積極性もかける生徒も多くみられる。

このような課題や実態を踏まえ、本年度も昨年から引き続き、個に応じた指導方法を研究する取組を重点化し、全ての子どもが持っている能力を十分に伸ばすことができるような授業づくりを研究することにした。

具体的には、各種学力調査や定期テストの結果から、生徒の実態を十分に把握し、課題を明確にしながら、スモールステップを設定した授業を進めていきたい。また、単元目標の達成に向けて単元や内容のまとまりごとに学びを振り返る場面を効果的かつ適切に設けることで、基礎学力の定着を目指したい。そして、一人ひとりが意欲的に学習に取り組めるような、課題の設定及び、発問の工夫の研究を通して、学習内容に応じた表現力を身に付けてさせたい。

3. 研究の進め方と方法

研究授業では、研究テーマに迫るための授業づくりを研究する。校内研修において、指導案検討会、模擬授業、事後研修を推進し、全員で学びを共有し、課題克服に努める。



構成メンバー

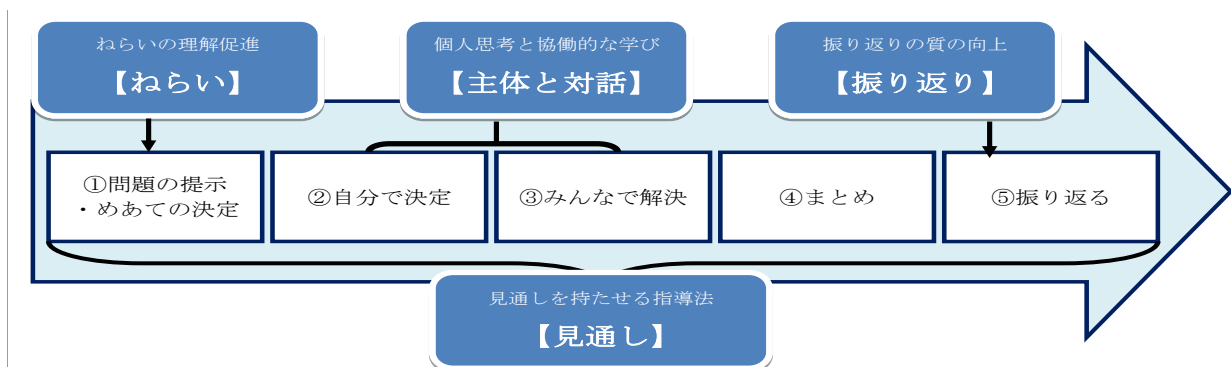
- | | |
|------------|------------|
| ・国語担当 (宮本) | ・社会担当 (保田) |
| ・数学担当 (吉岡) | ・音楽担当 (和泉) |

4. 研究内容 ～教科間連携による授業力向上の取り組みについて～

今年度は、昨年度の課題や生徒の実態を踏まえて、取り組み内容を見直しつつ、全ての子ども の学力向上をめざして、授業改善や授業力向上のための体制づくりが構築できるよう研究している。また、研究主題に迫るために、次のような研究仮説のもと、全ての子ども の学力向上を目指した授業づくりの実践を行ってきた。

- ①一人一人の学習定着状況を把握し、特性を理解した上で、効果的な学習の場を設定することで、生徒の持っている力を十分に発揮させることができるであろう。
- ②学ぶ意欲を高める主発問や課題設定の工夫を行うことで、表現力が高まるであろう。

これらの仮説から、今年度は、①基礎・基本の習得に結びつく効果的な繰り返し学習の設定、②学ぶ意欲を高める効果的な課題設定・発問の工夫、③下田の学びのスタイル（下図）の充実、の3つを具体的な研究内容とし、取組を継続してきた。



【教科間連携を中心とした研究サイクル】

(1) 授業研

参観者と授業者が協議等によって学びを深めるための研究授業を行っている。授業を参観する時には、参観シートを活用して授業を見取っている。また、参観シートには生徒のつぶやきや活動の様子を記入し協議時に活用している。研究授業は各学期に各自が1回ずつ行うこととし、全校研は、各学期一回ずつ授業を行った。研究授業をするにあたり、2週間前に指導案検討会、1週間前に模擬授業を行い、生徒の反応や、どうしたら効果的な意見交換になるのかなど話し合うことができた。

(2) 校内研修

①指導主事の講師招聘

講師を招聘した全校研としては、1学期に「個に応じた指導方法の工夫」という内容を西部教育事務所の指導主事を招聘し研修を行った。研修では、指導主事より『「今求められる」資質・能力ベースを育成する授業づくり』について講話を聴き、生きて働く知識及び技能について国語科の例を中心に研修を深めることができた。講話の中では、「知識及び技能が習得させるようにすること」の中で、大事だと思う部分を実際に指導要領解説総則を読み線を引き意見交流しながら大切なポイントを確認した。生きて働く知識・技能とは、授業の中だけでなく、実際の場面や他教科の中で習得した知識を活用できることや、習得した知識・技能を活用し、思考や判断、表現等を行う活動ができることだと共通認識することができた。

②実践ミニレポート

各学期末に授業者の学びを深めるための自身の実践をまとめたレポートを作成し、総括校内研で全教員が発表し、成果のあった取組や課題の共有をする。レポートは「校内研の取組が授業改善・学力向上に効果があったのかどうか」を大きな視点として、基礎学力についての取組と、個別支援の方法について記入している。生徒の変容が目に見えるように成果物を添付することもある。

この取組は授業者に、自分の授業の振り返りを促すとともに、教員相互で学び合い、授業実践し、さらに授業改善を図ることを目的としているが、他の教員の発表内容（取組）を自身の授業に取り入れたり、その後の実践に活かしたりする等、より深い実践となっている。

具体的な取組

- ①基礎学力の定着のための個に応じた学習の実施
- ②めあて・ねらいにせまる中心発問（課題）の工夫
- ③表現力の向上につながる単元の終末の振り返りの工夫
- ④教員相互で学び合う研究授業の推進（学習指導案検討、模擬授業、研究授業、授業評価アンケート、事後検討会、実践レポート作成等）

また、根拠をもとに自分の考えを言えたり書けたりできるよう、発表や説明の仕方を身に付けるために、研究授業の中で必ずペア学習の場面を設定することを全体で確認した。

5. 今年度の成果と課題

今年度の取組を通して、生徒一人一人が授業に対して意欲的に取り組めるようになったと感じている。これまでは一部の生徒がリーダーとなって進んでいるような雰囲気があったが、今年度後半からは全員が自ら主体的に学ぼうとする姿が見られるようになった。理由の一つとして、検証①の「特性を理解した上で効果的な学習の場を設定すること」を意識した授業づくりの効果ではないかと考えられる。全教科で、そのことを意識した授業づくりを心がけていたことが職員の情報交換から聴くことができた。また、生徒同士で意見交換する場面を増やし、互いに高め合おうという雰囲気もできてきた。少人数ではあるが、学力差が大きな集団で、教えてもらったり教えたりすることで互いにより確実な学力を身に付けることができた。そして、各教科で習得した知識・技能については、総合的な学習の時間（ふるさと学習）の中でしっかりとした力になり、発揮することができた。課題を見つける力、情報を収集する力、まとめ表現する力など、生徒が将来、未知の世界に飛び込んだ時、必ず必要になる力の基盤を、この一年間で築くことができたのではないかと思います。

課題は、検証②の「学ぶ意欲を高める主発問や課題設定の工夫」について、難しさを感じたことである。特に、「どのような発問が深い学びにつながるのか」については、これからも自分たちが授業づくりにおいて大切にしなければならぬことである。